

大画面形式の源氏物語図屏風の成立に関する一考察  
 ーいわゆる「隠岐配流図」(キンベル美術館蔵)を手かがりにー

東京大学 鷲頭 桂

源氏絵は絵巻や色紙などの媒体で古くより親しまれ、室町~江戸時代には屏風形式の作品が数多く制作された。本発表では、一隻に物語の一場面を描いたいわゆる「大画面形式」の源氏絵屏風がいつ頃、どのような変化を経て成立したのかという未解決の問題について考察する。

「隠岐配流図」(キンベル美術館蔵)は室町後期に制作されたとされる六曲一隻の屏風である。先行研究では『増鏡』の後鳥羽院もしくは後醍醐天皇の隠岐配流を描いたものとされてきた。しかし、画中のモチーフをテキストと照らし合わせて検証すると、本図はむしろ『源氏物語』「須磨」「明石」帖が典拠となっていることが明らかとなる。伝土佐光茂筆「明石・浮舟図」(今治市河野美術館蔵)のうち「明石図」の存在も、「隠岐配流図」の主題が本来は「明石図」であったことを傍証する。また、本図の画風は従来言われてきた土佐光茂周辺のそれとは異なるものの、光茂が享禄4年(1531)に制作した「当麻寺縁起絵巻」(当麻寺蔵)と類似するモチーフが認められる。このことから、本図は土佐派による原本をもとにした模本である可能性が想定される。すなわち、本図は源氏絵屏風のなかでも初期の作品の姿を今に伝える重要な遺例と考えられるのである。

キンベル本のような大画面形式の源氏絵屏風はいかに登場したのだろうか。これまでは、色紙など小画面を中心に継承されてきた図案が引き伸ばされることで成立したとする見方が有力であった。しかし、本図の構図、つまり画面下部に広がる砂浜と屏風一面を埋め尽くす波濤は、色紙などの小品よりむしろ「浜松図屏風」(個人蔵)に近い。両者には共通するモチーフも見られる。また、「浜松図」は須磨や明石といった海浜の名所の景として鑑賞されたともいわれる。このことを踏まえると、本図成立の背景には、屏風という形式に定着していた名所絵(浜松図)が源氏絵に転用される、いわば本歌取りのような変容が想定できるのではないだろうか。源氏絵以外の屏風絵を源氏絵として転用した作例は他にもあげられるだろう。光茂筆「車争図」(仁和寺蔵)には賀茂祭で賑わう一条大路の様子が描かれているが、登場人物を取り巻く都の家々は整然と並び、洛中洛外図を想起させる。光茂は「日吉山王・祇園祭礼図」(サントリー美術館蔵)など洛中洛外図の変奏というべき作品を残しているが、「車争図」においても、新興のジャンルである洛中洛外図を援用することで、廃絶して久しい王朝の年中行事を当世風に蘇らせる目論見があったのではないだろうか。

光茂周辺の作品を取り上げ、既存の屏風絵が土台となって大画面形式の源氏絵という新しい領域が成立したことを論じる本発表は、俵屋宗達筆「関屋・滯標図」(静嘉堂文庫美術館)が登場する背景には、既に室町後期に土佐派などを中心に優れた源氏絵屏風が制作されていた状況があったことをより明確にもするはずである。